

# 琉球大学学術リポジトリ

知的障害のある子どものための性教育実践の課題  
—理解を促すための効果的な教材・教具の視点から—

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 琉球大学大学院教育学研究科<br>公開日: 2022-05-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 島内, 梨沙<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24564/0002017987">https://doi.org/10.24564/0002017987</a>                           |

## 知的障害のある子どものための性教育実践の課題

—理解を促すための効果的な教材・教具の視点から—

Sex Education for Children with Intellectual Disabilities

島内 梨沙

Risa SHIMAUCHI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

### 1. 研究テーマ設定の理由と本研究の目的

特別支援学校における子どもの性的問題は、乗り越えるべき重要な実践的課題の1つである。知的な発達に障害のある子どもも、第二次性徴の発現は通常発達の子どものほとんど変わりのないことが各種調査に報告されているものの（児嶋他、1996）、実際に特別支援学校において、十分な性教育が実施されているかについては疑問もある。原（2010）によれば、知的障害児への学校での性教育は、継続的な取り組みや教材等の開発も困難な状態が今日まで続いており、その背景には学習指導要領の中での性教育の位置づけがあいまいなことに加えて、教員や保護者の中にある「寝た子を起こすな」という性教育への消極的姿勢が存在する。更に、2003年頃に起こった「七生養護学校事件」<sup>1)</sup>がもたらした影響も小さくはない。

内閣府が2017年～2018年に全国の相談・支援団体を対象に行った調査では、30歳未満の性被害の事例のうち、障害者が関係する事例は70件あり、55%を占めた<sup>2)</sup>。障害児・者は、たとえ嫌だと思っても、それを表現したり抵抗したりすることができにくいことから、性の被害者となってしまったり、性的欲求の表し方や処理の仕方が分からずに、他者に無理矢理、あるいは無意識のうちに性的な行為を行い加害者になってしまうということもありうる。また、性に関する事件の多くは、学校の教師や放課後児童デイサービスの職員、親やきょうだいなどの、身近な人が加害者である場合が多く、こうした現実を踏まえた「予防教育」としての側面からも、しっかりと性教育を行う必要があると考える。

教材とは、「子どもが直接学習する対象となる具体的な事実・事物・現象である。教具は、教材のモノ的側面、モノ化された部分である。同じモノを使っても、教育目標によって使い方も重要な点も変わってくる」（川地、2021）。また、岡野（2018）は、「知的障害の児童・生徒は、通常の学校における学習によって獲得した知識や技能の定着が断片的になりやすい傾向を備えている。そのため学んだことを、実際の生活の場面の中でいざ応用して活用しようとする時、どうしていいかわからない状況になることが多々ある。それを克服するために、指導面では実際の生活場面に合わせながら、何度も繰り返して根気よく学習することが必要になる」と述べている。これらの指摘から、知的障害のある子どもの理解を促すためには一人一人の実態に合った教材・教具を用いることがより重要な課題として浮かび上がってくるのではないだろうか。

こうした認識を下に、本研究においては、まず、特別支援学校で教師へのインタビュー調査とアンケート調査を通して、学校の性教育の実態・性教育に対する教師の意識について明らかにする。その上で、知的障害のある子どもに対して、積極的に性教育を展開していくために重要で具体的な実践課題である、性教育の教材・教具の開発と工夫の視点と方法について、先行（実践）研究と、筆者の授業実践を通して明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

特別支援学校で教師に行ったインタビュー調査とアンケート調査を踏まえ、学校・子どもの実態、こ

れまで行われた性教育の実践記録を参考にしながら、子どもの理解を促すための効果的な教材・教具はどのようなものであるか、授業実践を通した子どもの変容を見取ることで、検討を進める。

### 3. 研究内容

#### (1) インタビュー調査

特別支援学校3校に課題発見実習で訪問した際、教師に対し、実践している性教育の具体的な内容と性教育に対する意識や考え方について半構造的インタビューを実施した。その結果明らかになったことは、まず第1に、インタビューを依頼した際に、「体育の先生に聞いて」と言われたことから、教師の中で性教育は、保健・体育教師が行うものという意識があることである。第2に、性教育を研究している教師が職場内にいると、何か問題が起きた際には助言をもらうが、日頃からその教師に性教育について学んでいる訳ではないということ。しかしながら、第3に、性教育が必要であるという意識は教師全員が持っており、性教育には保護者との連携が欠かせないと考えているということである。

また、こうした教師たちとは対照的に、民間の性教育研究団体に所属し、積極的に性教育に取り組んでいる特別支援学校小学部のD教諭にもインタビューを行った。D教諭は、現場において性教育が積極的に行われていないことに関して「ほとんどの教師は、性教育は、問題が起きた場合に行うものであり、問題を起ささないようにするものという考えになっている」「教育課程や教科書に載っていないことにより、どう教えたらいかがわからないのではないか」と述べていた。

#### (2) アンケート調査

課題発見実習を行った県立A特別支援学校と、課題解決実習を行った県立B特別支援学校の小学部41名、中学部19名、高等部20名、寄宿舎職員3名の計83名(男性:37名,女性:46名)を対象に性教育に関してどのような考えを持っているか、またこれまで行ってきた性教育はどのようなものであったか、性教育の実態を把握するために、以下のようなアンケート調査を行った。なお、図5・6については記述式で回答を求めた結果をまとめたものである。

図1の「学校での性教育の必要性」については、「1必要ではないと思う～5とても必要だと思う」の5件法で回答を求めたところ平均値4.78という結果が得られた。このことから、多くの教員が学校で性教育を行う必要があると考えていることが明らかとなった。

図2の「性教育を始める適切な時期」としては、学校入学以前と小学部低学年の回答が多かったことから、教師は早い段階から性教育を始めることが適切であると考えていることが明らかとなった。

図3の「性教育の実施の経験と領域について」分かることとしては、性教育が最も行われている領域は自立活動であった。次いで授業以外の時間、保健体育が同値だったことから、保健体育では学習指導要領における性教育の内容が授業内容として位置付いており、また日常生活における様々な場面では適宜必要な性教育が行われていることがわかる。

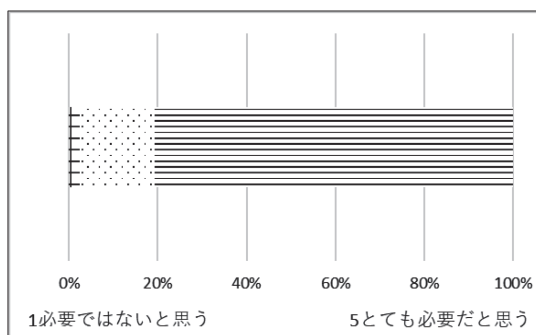


図1 学校での性教育の必要性

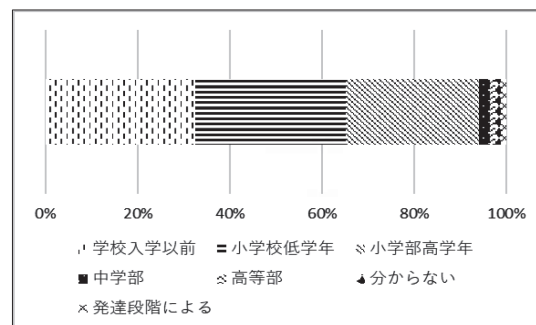


図2 性教育を始める適切な時期

図4の「性教育の実施内容」については、清潔に関すること（手洗い・うがい・着替え）距離感について（パーソナルスペース）、プライベートゾーンについての授業を行った教師が多かった。児嶋(2012)による教師の性教育に関する意識調査の結果では、性教育の内容として重視するのは「清潔」を選ぶ教師が最も多く、小学部担任は「生活習慣」と関連した項目、中学部担任は「第二次性徴」に関連した項目、高等部担任では「男女交際」「避妊」「性被害」など具体的な項目を幅広く選ぶ傾向があったとしている。紙面の都合上詳細は記載していないが、これは筆者が行ったアンケートにおいても同様の結果が得られた。

図5の「性教育に関して困っていること」については、回答を①教師自身が抱える困り感②子どもに対して感じる困り感③保護者に関する困り感④無しの4つに分類することができた。④無し of 回答数が最も多かったが、挙げられた困り感の殆どは、「自分（教師）自身の性教育に対しての知識不足がありどのように指導したら良いのか分からない」「指導内容・指導方法が分からない」など教師自身が抱えるものであった。

図6の「性教育が必要であると感じた場面」については、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」<sup>3)</sup>を視点にした8つのキーコンセプトとその他の9つの視点で分類した。アンケート結果からは、「人間関係」「暴力と安全確保」「人間のからだと発達」「セクシュアリティと性的行動」の4つにおいて特に性教育の必要性を感じていることが分かった<sup>4)</sup>。

### (3)実践研究

表1は、知的障害のある子どもに授業を行う上でどのような教材・教具が使用されているのか、性教育に関する総合情報誌である、‘人間と性’教育研究協議会編『季刊セクシュアリティ』誌に掲載された実践事例から整理したものである。工藤(2015)によれば、知的障害のある子どもは、物事を抽象化することに困難を抱えているため、実物（自分が体験することと隔たりが少ないこと）に近い模型教材が必要不可欠であるとされており、絵本や動画など視覚的に訴える教材や、模型や友達同士など実際に触れたり、体験を通して感覚に訴えたりする教材が多く活用されていることが特徴として捉えられる。筆者が整理した実践事例からも、工藤が述べているような教材・教具が多く活用されていることが分かる（尚、今回筆者が整理した実践事例には、特別支援学校の中学部のものは見られなかった）。

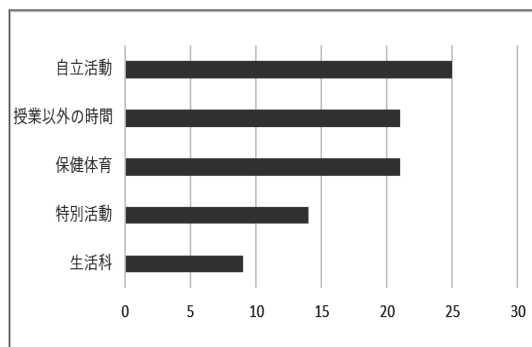


図3 性教育の実施の経験と領域 (人)

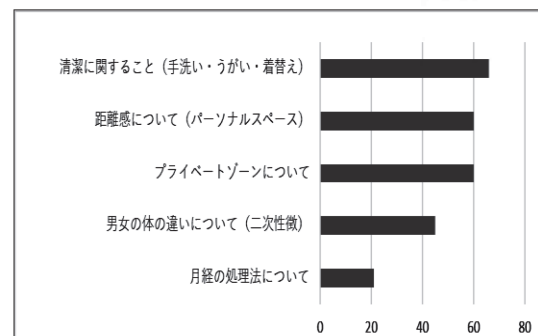


図4 性教育の実施内容について (人)

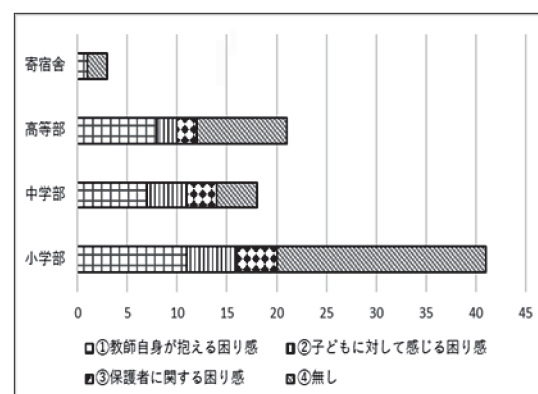


図5 性教育に関して困っていること (人)

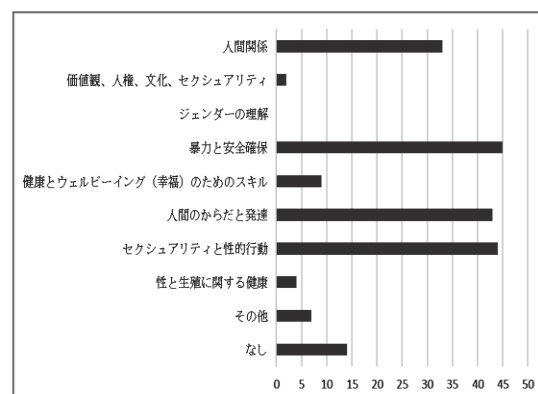


図6 性教育が必要であると感じた場面 (人)

表1 知的障害のある子どもの性教育に関する教材・教具の分類<sup>5)</sup>

| No. | 主な内容                 | 特別支援学校  |   |   | 特別支援学級  |   | その他<br>【児童デイ】【施設】【寄宿舍】<br>【保育園・幼稚園】                              |
|-----|----------------------|---|---|---|---|---|--|
|     |                      | 小学部   | 中学部   | 高等部   | 小学校   | 中学校   |  |
| 1   | 性器の洗い方や強い方、<br>排泄の学習 | ・ポータブル洋式トイレ<br>・小便秘器・ペニスの模型   |   |   | ・絵本・移動教室での実践  | ・ペニスの模型   | ・ペニス(ストックング)・ワジナ(フェルト)<br>・トイレセット【児童デイ】                          |
| 2   | 妊婦体験、産道体験            |   |   | ・抱っこ紐にアイズノンをつめ、擬似体験   |   | ・7kgのエプロン   | ・布のトンネル(産道)【保・幼】   |
| 3   | 子育て体験                | ・赤ちゃん人形   |   |   |   | ・沐浴人形・YouTube(動画)   |  |
| 4   | 性交と避妊の学習             |   |   | ・性交の絵を見て学ぶ<br>・コンドームの付け方の動画とペニスの模型  |   | ・粘土版で作成した模型・コンドーム   |  |
| 5   | 交際についての話し合い          |   |   | ・公式デートDV予防の動画   |   | ・ワークシートを用い、デート代について考える  | ・職員による劇・フォークダンス・合コン【施設】<br>・性教育の絵本・デートについてのロールビデオ・手作りハンドブック【寄宿舍】 |
| 6   | ふれあい(快の体験)           | ・サイコロゲーム<br>・ホットウォーターベッド<br>・タオルマッサージ<br>・ホットウォータープール<br>・アロマオイルマッサージ |   |   | ・ハンドマッサージ   | ・読み聞かせ『ぎゅっ』・友達同士で握手<br>・腕組み・抱き合う・頬をつけ・頬へのキス                       | ・ホットタオル(マッサージ)【保・幼】<br>・サイコロゲーム・フォークダンス【施設】                      |
| 7   | 自分について考える<br>自分史     | ・赤ちゃんのころの写真   | ・幼い頃の写真   |   | ・赤ちゃんの頃について保護者にアンケートを取り、<br>写真を添えてどの児童かクイズを行う<br>・産まれた時の様子やエピソードを聞く<br>・絵本『おおきくなるっていいことは』                                   |   | ・絵本『おおきくなるっていいことは』【施設】   |
| 8   | プライベートゾーン            |   | ・写真絵本『おんなのこってなあに？<br>おとこのこってなあに？』   | ・産道、ペニス、ワジナの模型を作成<br>・裸の紙人形・プライベートゾーンを隠す洋服選び<br>・写真絵本『おんなのこってなあに？おとこのこ<br>ってなあに？』 | ・写真絵本『おんなのこってなあに？<br>おとこのこってなあに？』<br>・生徒の体の輪郭を写し取って切り取り、<br>胸や外性器など、体の名シールを貼る<br>・水着を作りプライベートゾーンを隠す<br>・性教育ビデオ「おとこのこ おんなのこ」 | ・絵を用い、性器と名称を確認・パンツ、ブラ<br>ジャーの作成・からだうた【児童デイ】                       |  |
| 9   | 赤ちゃんができるまで           |   | ・動画・図鑑・ペーパーサート・人形・粘土<br>・エコー写真・性器が結合している図   | ・精子と卵子についての顕微鏡の写真<br>・紙芝居『いのちのはじまり』<br>・受胎を顕微鏡(紙に針で穴をあける)                         |   |   |  |
| 10  | 生命の誕生について            | ・教員の出産ビデオ<br>・子宮内体験<br>・お腹の中の赤ちゃんの教員劇<br>・赤ちゃんの人形を抱く                  | ・妊婦さんのゲスト講話<br>・ビデオ「うまれるよ」・等身大の人形<br>・エコー写真・絵本『セックスの絵本』   | ・出産動画・卵の写真クイズ・ヤゴの飼育<br>・赤ちゃん人形・エコー写真<br>・妊婦さんや赤ちゃんがいる人をゲストに呼び、<br>交流をする           |   |   |  |
| 11  | 第二次性徴                |   | ・絵本『おちんちんの話』<br>・スージー&フレッド人形  |   | ・男女の裸の絵に下着や洋服や体のパーツを<br>つける   | ・『男の子のからだの絵本』【施設】   |  |
| 12  | その他                  |   | ・虹の輪(パーソナルスペース)<br>・恋愛ドラマ作り・保護者からのアンケート<br>・おしゃれ体験<br>・性感染症について(挿絵つきのプリントと図)<br>・教科書『ひとりふたりでみんなと』 |   | ・保護者の声を盛り込んだ教科書<br>・性被害にあった方々のパフォーマンス動画<br>・人形を使ってTPOに合わせた行動練習  | ・クラス通信(保護者への呼びかけ)【幼・保】<br>・等身大の模型・VRの動画作成(マスターペー<br>ションの擬似体験)【施設】 |  |

#### 4. 研究の実際

紙面の都合上、以下に実践1と実践2を示す。なお、中間報告書では本報告書とは別の実践事例を記載しているので、併せて参照されたい。

##### (1) 実践1

①期間 2021年9月1日～10月29日(課題解決実習)

②対象者 県立B特別支援学校 中学部2年生A・B課程(男子2名女子3名の計5名)

③授業内容

・題材名 「ふれあいすごろくゲーム」～心と身体の触れ合い～

・目標

○触れ合いのルールを理解することができる

○自分の気持ちを他者に伝えることができる

○他者の思いを受け止め、尊重することができる

○活動に最後まで取り組み、他者と触れ合う心地良さを体感することができる

・本時の流れ（表2参照）

表2 『ふれあいすごろくゲーム』指導案

|        |   |
|--------|---|
| 導入(5)  | ・本時の授業の流れについてパワーポイントで確認する   |
| 展開(35) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・すごろくのルールを確認する(サイコロの目(数字)・コマの進め方・スタートとゴールの位置)</li> <li>・「ふれあい」の意味・気持ちについて知る</li> <li>・ふれあいすごろくゲームのルールを確認する(自己決定を行う・断ることも可能であること・お礼の言葉を言う等)</li> <li>・教師のデモンストレーションを見る</li> <li>・ゲームを行う(自己決定の場を意識して設けたり、自分の気持ちを他者に伝えたり、相手の気持ちを尊重する事を大切にする)</li> </ul> |
| まとめ(5) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時を振り返り、活動を通して良かった所を賞賛し、自己肯定感を高める(教師)</li> <li>・ふれあいすごろくゲームで大切な事を確認する(自分の気持ちを他者に伝える事・他者の気持ちを受け入れること・相手の事を考えて行動する事が大切である事)</li> </ul>  |



図7 実際に使用した教具①  
(大きなサイコロ)



図8 実際に使用した教具②  
(すごろく表)

表3 生徒の実態, 指導内容, 教材・教具

| 生徒の実態   | 指導内容   | 教材・教具   |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒同士や教員に対して距離が近い場面が多く見られる</li> <li>・個人的な性的課題が見られる生徒がいる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふれあいすごろくゲーム」を行い、心地良い触れ合いや心地良いコミュニケーションを経験し、自分や相手を思いやり大切にすることを学び、日常生活に活かせるようにする</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイント</li> <li>・大きなサイコロ(図7)</li> <li>・「握手をする」「ハイタッチをする」などの項目を取れ入れたすごろく表(図8)</li> <li>・コマ(生徒それぞれが好きなキャラクター)</li> </ul> |

④授業実践の成果と課題

本授業で行ったふれあいすごろくゲームでは、ゲームの要素を活かして生徒が授業に参加することができること、心地良いふれあいや心地良いコミュニケーションを経験することで自分や相手を思いやり大切にすることができることを目的に行った。「肩もみをする」「ハイタッチをする」等といったマスがあり、マスに書かれていることを行うか行わないか自分の意思で決めることができ、決めた際には行う相手を選び、「〇〇しても良いですか?」と問い、「良いですよ」と返事がきたらそのマスに書いてあることを実行するというルールで行った。

授業では自分の意思でマスに書かれていることを行うか行わないか全員が決めることができており、嫌だと思えることはしっかりと断ることができていた。実習期間中に、「また、ふれあいすごろくゲームがしたい」と生徒からの意見があったり、普段初めて行うことには全く参加しない生徒が、机に伏せることなく皆の活動を見たり、発言をしたりしていたことから、ゲーム要素が入っていれば授業への参加意欲が増すということを実感した。また、島宗・藤澤(2016)は、ゲームには順番や約束事を守るといった他者とのコミュニケーションが内在化されていて、ゲームの進行やペナルティ、勝敗などによる行動随伴性も明確である。「遊び」とい

島内：知的障害のある子どものための性教育実践の課題

う日常生活に近い場面で楽しみながら学べる機会が提供できれば、日常生活への般化も期待できると述べている。教材・教具としてゲームを活用することで子どもの授業参加・理解促進が期待できるのではないだろうか。課題としては、本授業で行ったことを日常生活に活かせるようにどう継続指導を行っていくかである。

実習は期間が決まっていたため、授業後の生徒の様子を長期的にみることは不可能であったが、距離が近くなった際や、友達の肩や髪の毛を必要以上に触ったり、場面にそぐわないタッチが見られたりした際には、その都度触れ合いのルールを確認した。本授業で生徒が学んだことを日常生活と繋げながら声掛けを行うことが必要である。

(2) 実践2

①期間 2021年9月1日～10月29日 (課題解決実習)

②対象者 県立B特別支援学校 中学部2年生A、B課程 (女子2名)

③授業内容

- ・ 題材名 「大切な自分の体について知ろう」
- ・ 目標
  - 月経の適切な対処法を知ることができる
  - 月経時の自分の心と体の状態と比較することができる
  - 心と体の変化について興味をもち、進んで学習活動に取り組むことができる
- ・ 本時の流れ (表4参照)

表4 『大切な自分の体について知ろう』指導案

|        |   |
|--------|---|
| 導入(5)  | ・ 本時の授業の流れをパワーポイントで確認する   |
| 展開(35) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 思春期に起こる変化(心・体)について前時の復習をする</li> <li>・ なぜ月経が起こるのか意味を知る</li> <li>・ 月経の際に起こる心と体の変化について知る</li> <li>・ 月経の正しい対処法を知る(なぜナプキンを替えないといけないのか・ナプキン交換の頻度について・ナプキンの替え方の確認)</li> </ul> |
| まとめ(5) | ・ 本時のまとめと振り返りをプリントで行う   |

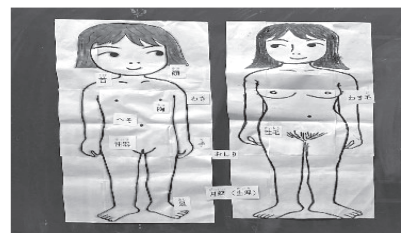


図9 二次性徴を表す等身大の図



図10 具体物(生理用ナプキン)

表5 生徒の実態, 指導内容, 教材・教具

| 生徒の実態   | 指導内容   | 教材・教具  |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 月経は全員が発現しており、体の発育・発達に関して否定的な言動は見られないが、上手く対処できているか不透明なこと、発達段階的にも体と心に変化していると考えられる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時で行った思春期に起こる心と体の変化について振り返る</li> <li>・ 月経について具体物(生理用ナプキン)を用いて適切な対処の仕方とナプキン交換の頻度を操作的・視覚的に確認することで、自分の対処の仕方が適切であったか生徒自身で確認できるようにする</li> <li>・ 月経時に起こる心と体の変化について学習する</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ パワーポイント</li> <li>・ 等身大の図(図9)</li> <li>・ 【女の子と女の子の人】</li> <li>・ 単語カード</li> <li>・ プリント</li> <li>・ 生理用ナプキン(図10)</li> </ul> |

### ④授業実践の成果と課題

本授業は前時で行った思春期に起こる心と体の変化について復習した後、月経が何のために起こるのか、月経の対処法について具体物（生理用ナプキン）を使って理解を促すこと、ナプキンの交換の頻度はどのくらいであるか経血の量を視覚的に確認しながら確かめることを目的に行った。

パワーポイントを用いて月経が起こる理由を説明した際に生徒Aから「あ！そういうことなんだ」という発言があった。これまでの実践の中で生徒からの発言や感想から授業内容を理解しているか見取ることができず担任の先生が生徒の日頃の様子と比較して理解しているかを確認していた。しかし、この発言はほんの一言の呟きではあるが、生徒が授業内容を理解しているかどうかを直接見取ることのできるものとなった。

また、具体物（生理用ナプキン）を使用して実際に処理の仕方を確認するといった操作活動を行ったことで、生徒の実生活（月経時の実態）と照らし合わせながら授業を行うことができた。経血の量を確認しながらどのくらいの頻度でナプキンを替えるか確認したところ、そもそもトイレに行く回数が少ないこと、月経の日数や経血の量に関係なく、適切なナプキンの替え方が出来ていないことが分かった。生理用ナプキンという事物に、経血に見立てた絵の具をつけて生理という現象を視覚的に示すことにより、生徒がどのくらいの経血の量でナプキンを替えているか、普段実態を把握することの出来ないことについて知ることができた。このことから、知的障害のある子どもの理解を促すためには日常生活で普段から使用している具体物を教材・教具として活用することの重要性が示されたと言えるだろう。

## 5. 総合考察

特別支援学校の教師に行ったインタビュー調査とアンケート調査から学校で何らかの性教育は行われており、教師の意識としても学校で性教育を行うことが必要であると考えていることが明らかとなった。知的障害のある子どもたちへの性教育は、その障害特性である、学習によって獲得した知識や技能の定着が断片的になりやすいという傾向を踏まえ、一人一人の実態に合った教材・教具を用いた性教育を行うことが求められる。しかしながら、その具体化のためには、教師自身がどのような内容の性教育を行ってよいか分からないことや、更にはどのような教材・教具を用いて授業を行ったらよいか分からないといった課題もあり、授業を通してより実践的な検討の必要性が浮かび上がってきた。

そこで、筆者は、1回目にすごろくを教具としてゲーム要素を取り入れた心地良いふれあいを体験する「ふれあいすごろくゲーム」を、2回目には実際に生活場面で使用する具体物（生理用ナプキン）を使って月経の処理の仕方を確認する操作活動を取り入れた授業実践を行った。

1回目の実践では、授業で扱う教材・教具にゲーム要素があると子ども達は授業への参加意欲が増加し、普段授業に参加できない生徒や周りの友達と上手くコミュニケーションを取ることができない生徒も積極的に参加し、授業の中でコミュニケーションを取ることができた。そして何より、授業後には今まで頻繁に見られた過度なタッチ（接触）が減少することになった。また、2回目の実践から2ヶ月経って生徒と先生に授業後の変容についてインタビューを行ったところ、生徒Aからは、「(ナプキンを) 替えなければいけないと思って替えている」という答えが返ってきた。加えて先生からは、「今までナプキンを替える頻度は少なかったけれど、授業を受けてからは、ナプキンを替えに行く回数がだいぶ増えた」「生理が始まった時、生理に関して困ったことがある時には自分から話してくれるようになった」との成果を聞くことができた。こうした授業中の生徒の様子や、授業後の生徒の姿からも明らかのように、子どもの行動変容につながるための性教育の授業にとって、活動的要素を含む教材・教具や実物（自分が体験することと隔たりが少ないもの）に近い教具の有効性が確認され、その準備のための意識的な工夫・開発という教師にとっての実践的課題が明確になった。



## 6. おわりに

本研究においての2つの実践は全て1学級でしか行っておらず、継続的な取り組みとはなっていない。更に意識的に実践を重ねることで、知的障害のある子どもの理解を促すための教材・教具の条件はより明確になり、子どもたちのための実践創造に寄与できるものと考えられる。今後は本研究を土台にしながら、筆者自身が担う小学校の教育現場において、主体的に教育実践に取り組み、効果的な教材・教具の開発と工夫に資するよう、研究を深めていきたい。

最後に、本研究を行うにあたっては、多くの方々にご支援いただいた。インタビュー調査とアンケート調査に御協力をして下さった県立A特別支援学校、県立B特別支援学校の先生方、寄宿舎の貴重な実践、「こころとからだの学習」の定期学習会に参加することを快く承諾して下さいました寄宿舎職員の皆様に深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) 東京都立七生養護学校では、子どもの性的逸脱行動の発覚により、「こころとからだの学習」と名付けられた性教育を含む総合的な学習を立ち上げ、様々な指導方法や教材の工夫に取り組んだ。実践は校長会・教頭会主催の夏期研修でも取り上げられるなど高い評価を受けていたが、都教委は「学習指導要領を踏まえない性教育を行った」等と校長及び教職員に対し厳重注意処分を行った。
- 2) 西日本新聞, 2019, 「泣き寝入りも…障害者への性暴力の実態「人間として扱われていない」30歳未満の被害の半数超」『西日本新聞デジタル』(<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/511765/> 閲覧日: 2021年12月22日)
- 3) 「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」とは国連教育科学文化機関・ユネスコ (UNESCO), 世界保健機関 (WHO) 等, 計6団体によって作成されたものである。初版が2010年に公刊され, 2020年に改訂版の翻訳が出版された。内容はこれまでの世界のとりくみと英知を集結してまとめられた性教育の基本課題と具体的な実践方向を明示した手引書であり, 性教育を進めていくうえでの世界のスタンダードとして位置付けられるものである。
- 4) 分類においては性教育研究会に所属している研究者と沖縄県立特別支援学校小学部の教員と検討しながら分類を行った。
- 5) “人間と性”教育研究協議会, 『季刊 セクシュアリティ』, エイデル研究所の以下の号から作成した。  
No. 3, 5, 17, 26, 53, 63, 68, 69, 71, 73, 74, 76, 78, 80, 81, 84, 87, 88, 89, 91, 94, 95, 96, 98

## 文献

- 原恵美子, 2010, 「知的障害児に対する特別支援学校における性教育実施と, 教諭と保護者の意識」『治療教育学研究』30:61-69.
- 川地亜弥子, 2021, 「現代の学校教育をめぐる政策・提言と教材論」『障害者問題研究』49:162-169.
- 児嶋芳朗, 2012, 「知的障害児の性教育に関する研究の動向」『特殊教育学研究』50(3):313-321.
- 児嶋芳朗・越野和之・大久保哲夫, 1996, 「知的障害児の性教育に関する一考察—養護学校全国調査より—」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』45(3):201-217.
- 工藤恭子・笹木葉子・村田重紀子, 2015, 「知的障害児の性教育における効果的な教材開発の研究—第1報 月経血モデルの制作を試みて—」『北海道文教大学研究紀要』39:11-18.
- 岡野由美子, 2018, 「知的障害のある児童生徒の教育課程と指導法について—新学習指導の改訂に視点を当てて—」『奈良学園大学人間教育学部』1(8):249-259.
- 島宗理・藤澤浩子, 2016, 「特別支援学級児童と交流学級児童とのやりとりを促進する双六ゲームの開発: ソーシャルスキルトレーニングと般化を促す」『法政大学文学部紀要』72:173-185.